

【Ⅱ. 個人研究実践 1】

理想の学生生活の構築を目指して

ピア・サポート、ピア・ラーニング活動報告

大正大学人間学部
教育人間学科 4年 増山友香

はじめに

昨今、大正大学では学部を超えた交流が少なく、学部の中でも縦・横の関係が希薄であると感じる。いや学部どころか学科内でも交流が少なく、関わる人が固定化されていると感じる学生の声を聞く。一方で、他学部の学生や他大学の学生との交流を経験した人たちは、今まで自分のいたコミュニティが固定化していたことに気づき、このような場がもっと早くほしかったという感想を話していた。

また、学生はそれぞれ様々な講義を受けているが、試験の答えは返却されない等、何ができるように身についたかを実感できないことが多い。

正規の講義とは別に学生同士の交流を行うことで、自分自身を振り返り、他者との違いに気づくことで、学生が共に成長できるのではないかと考えた。以下の視点が大事ではないかと考えた。

- ①学生一人ひとりにとって、より良い学生生活が送れること。個人の意識を顕在化し、学習意欲を促進するために、学生の関心領域やニーズの顕在化を図る。
- ②学生一人ひとりにとって、より良い学生生活が送れるように、学生同士の学び合いができる場・ネットワークの創出が重要。
- ③より良い学生生活を送りたいと考えている学生が一步を踏み出せるように、学生同士のネットワークや学び合いの場の創出が必要。

これらを踏まえて、ピア・サポート、ピア・ラーニングの手法を導入した取組みを試みた。取組は必ずしも順風満帆ではなかったが、試行錯誤の末に得られたものも大きかった。以下に詳述したい。

1. 活動の端緒

活動の発端は、2018年3月に行われた学生FDサミットである。所属するゼミナールのゼミ生数人と参加し、学生・教員・職員が協働で大学をより良くする活動を行っている人たちとの交流をしたことで、刺激を受けた。

初めは、「学生FD」の団体を企画していた。学生FDというのは、学生自身が大学や授業の在り方を考えて、より良くしていくための活動である。しかし、学生FDは、階段教室に

数百人の学生が集うような大規模な大学が行うものであり、授業改善という面から、大学に対抗する組織として敵視される恐れが大きいという助言を先生や職員からいただいた。そこで、ピア・サポート（同じような立場の人（peer）によるサポート）活動を行うことに至った。課題となったのが、この時の取組メンバー全員（6人）が4年生ということであった。就職活動や卒業論文と並行しながらの活動であったため、話し合いの時間を合わせることも一苦勞であった。そのような中でも話し合いは進み、8月には理念や目的が決まり、ピア・サポートを知ってもらうこと、後継者となるメンバーを集めるためのイベントの企画（大正大学学生TDスタッフふれいす(仮)）¹を構想した。

2. 鴨台祭（大正大学の学園祭）でのしゃべり場の実施 11月3日（土）

ピア・サポートのイベントを実行に移すことに苦戦していた中、出川真也先生が主宰する地域社会教育研究会の学園祭ブースの場においてしゃべり場の機会をいただき、実施することができた。

（1）実施内容

・参加者9名（ピア・サポートメンバー3人、地域社会教育研究会メンバー5人、社会人の方1人）。

・内容 ピア・サポートについての説明、しゃべり場の体験。

「理想の学生生活を考えよう!!」というテーマで、アイスブレイク（自己紹介）、アイデア出し（個人作業）、アイデアのまとめという流れで行った。付箋（ポストイット）、ペン、模造紙を使用し、付箋に意見を書き溜めていき、1人ずつ発表したあと、近い意見をグループ分けしてまとめた。



（2）実施結果

今回まとまった意見は、「ニーズを顕在化して、実行していく学生生活」であった。特定の学問だけではなく、幅広い勉強をしたり、夢を見つけられるような自由な過ごし方がしたい、という考えと、そのために金銭的な面や勉強ができる環境を大学に求める声の2つの意見が挙げられた。



3. 早稲田教育実践研究フォーラム（早稲田大学）での発表 11月10日（土）と展開

（1）早稲田教育実践研究フォーラム ラウンドテーブルでの報告

これまでの活動を報告することで、グループでの活動方法のアドバイスを得たいと考え、他大学等の方々とラウンドテーブルにおいて発表した。ラウンドテーブルに参加するのは今回が初めてであったが、同じ班の方々は熱心に話を聞いてくださり、多くの助言を頂いた。特に、次の2点である。

1点目は、他大学と比較して大正大学は保守的な組織である点だ。学園祭のチラシを配る時間が決まっていたり、事前申請が必要だというエピソードを話したら、とても驚かれた。学生の自主性が強い早稲田大学の学生が多かったのも大きい。

2点目は、楽しそうではない団体に新メンバーは入らないという指摘だ。私は、グループの話し合いの雰囲気は苦手だという点を課題として挙げていた。グループでの話し合いにおいて意見は必要なものである。しかし、意見の言いづらい雰囲気では、何かを発言することに精一杯になってしまう。また、発言したとしても、今はその話をしていない、と切られるという場面もあった。他学部の学生もいたため、ピア・サポートについての理解が人それぞれ違う点も大きかった。後輩のメンバーを迎えるには、組織の体制を変えていくのが必要だと感じた。

頂いた助言をまとめると、大学や組織の問題を乗り越えて強気で作ってほしい、作ったら本当に良いと思うし、人が集まると思う、と応援していただいた。

(2) グループを離れた新たな展開

早稲田大学でのラウンドテーブル後にメンバーの1人と対立をした。それは動きの少ないライングループで、メンバーはどうして誰も動こうとしない指示待ちなのか、動いた人はフィードバックが遅いのではないのか等、やる気がないなら無理にやる必要はないという内容であった。

フィードバックについては、文字での共有はしていたものの、後日話す機会がつかれなかったことを反省した。その人が熱心に活動をしようと企画段階から動いていたことから、今回私が中心となり動いたことを不快に思ったのだと感じた。

その後話し合いをし、互いに勘違いしていた部分があったということで和解をした。例えば、話し合いの雰囲気が悪い、に対して、皆（特に女子側）の意見が出ないからであって、真剣に考えているのに意見が出ないからイライラもするし、自分が考えてきたことで決定するしかない。雰囲気が悪いと思ったら、良くする努力はしたのかと逆に問われた。振り返れば、確かに私は意見を言うのに必死でその努力はしていなかったと感じた。一方で雰囲気づくりというのは相手との影響関係の中で構築するものではないだろうか。和解はしたものの、苦手意識は消えずにいた。

メンバーは皆4年生ということで、卒業論文で殺気立っていた（ように私は感じていた）ので、グループを離れ、個人的にピア・サポートに関心がある学生はいないか、空いた時間に自分で動いてみることにした。この際、メンバーに話しておけば良かったかもしれないが、混乱が生じることを危惧し、結局報告はしなかった。独自の活動を展開していくことにしたのである。

4. 地域創生学部でのしゃべり場の実践 12月5日（水）

（1）概要

地域創生学部は地域実習があり、その繋がりから、個人的に動いている学生もいる。大正大学の学部の中で主体的に動いている学生が一番多いという印象があったことから、他学部との違いを知ろうと考えた。また、ピア・サポートに興味がある学生が多いのではないかと考えた。個人的にどのような学生生活を過ごしているかという興味もあった。



今回地域創生学部でしゃべり場を行うにあたり、教育人間学科の学生にも新たに協力をお願いし、実施した。

（2）実施内容

参加者6名（ピアサポートメンバー2人、地域創生学部2年生 4人）

内容は、第1回目と同様に「理想の大学生活を考えよう」であった。

（3）実施結果

まとまった意見は、「大学の授業、設備、組織への不満＋大学側の説明不足＝学生が大学に行く価値や将来への不安を抱いている」であり、テーマの「理想の学生生活」の話題になる以前の話しの展開となったことに衝撃を覚えた。大学への不満が多いことが分かり、他学部にはない良さを知りたかった私にとっては予想外の結果となった。



具体的には、大学の授業、設備から、組織そのものへの不満（教員間の連携のなさ、教務課の対応の悪さ、必要ない書類の提出、さらには経営者の独占）、また、大学側の説明不足が指摘され（実習地が消えた、キャップ制の導入、学科のおかしな制度、チューター制、成績のつけ方が理不尽、地域創生だけの授業ばかり）、学生が大学に行く価値や将来への不安を抱いていた（視野を広くしたい、将来に生きる勉強がしたい、みんな素を出さない、大学自体の評価が低い）。

地域創生学部の学生達が、疑問に思ったり、不満に思ったりすることは多いが、それを変えようとする力さえ大学に吸い取られているように感じた。学生がそう思うほど、大学の経営に問題があるのではないかと疑われるものであった。他学部との交流がしにく

いように仕組みられているように感じられた。

参加学生からは、交流の機会があっても、大学の体制の話のような真剣な話はしないと感想を頂き、地域創生学部にとっても他学部にとっても、交流できる場が重要であると考えた。

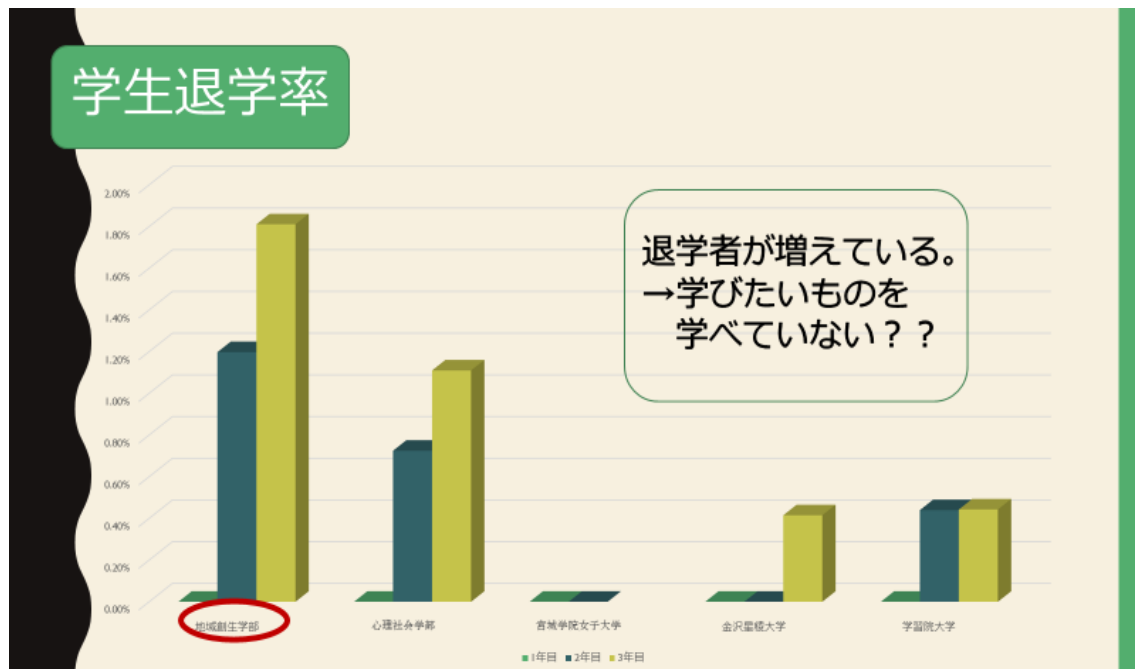
(4) 公開データからの考察

「大学の闇」かもしれない部分は学生の声から見えたが、実際にどのようなことになっているかを調べるため公開されているデータから考察を行った。具体的には、地域創生学部と同じ年に新設された他大学の学部の履行状況報告書ⁱⁱの比較である。履行状況報告書から、「学生退学率」「科目変更率」「教員辞任率」の3点を比較した。

1) 学生退学率

「学生退学率」では、学生がどれだけ大学を辞めているかが分かる。地域創生学部は3年目で1.81%の学生が退学していた。他大学の最高数値は1.11%であった。ただこのデータは全学年対象による数字の取り方の問題があり、実際感覚と異なるものと思う。具体的には大正大学地域創生学部は、初年度入学62名の入学者に対して、10名ほどの退学者が出ていることから、入学年別の退学率で計算すると、初年度入学者は実に20パーセント近い退学者が出ていることを意味する。また、初年度入学制の退学時期で特徴的なのは、一般に言われる1年次ではなく2年次以降での退学が目立つことであろう。

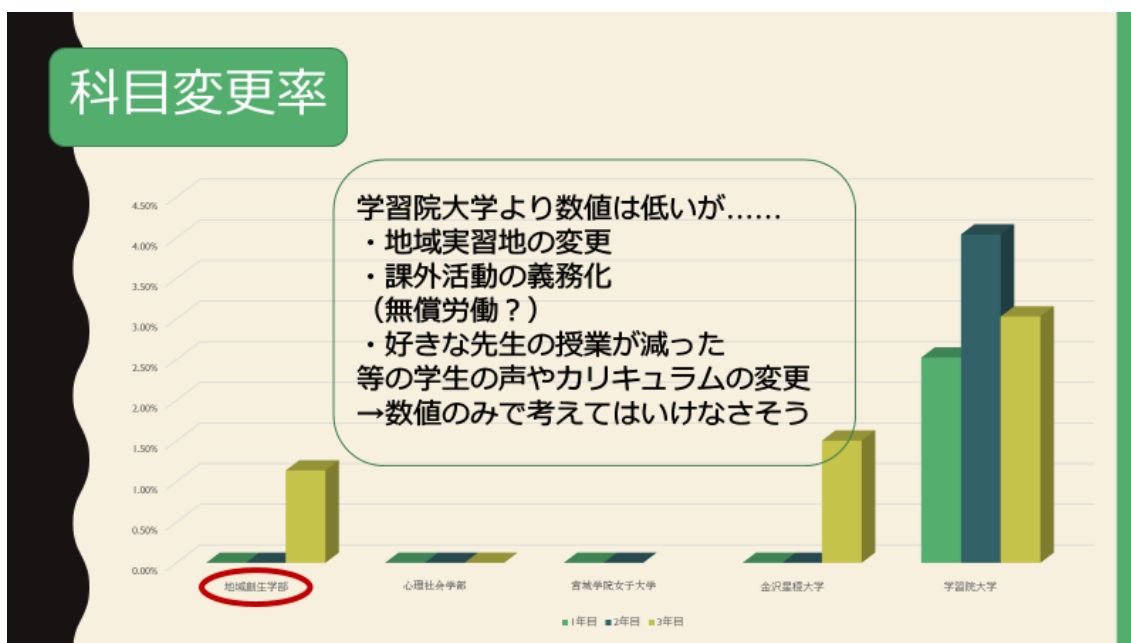
退学理由は人さまざまであるが、学びたいものを学べていないのも理由の一つではないかと考えた。



2) 科目変更率

「科目変更率」は、計画当初の科目を現在も開講しているかを検討できる。3年目で1.14%の科目が変更されていることが分かった。他大学(3.03%が変更)より数値は低い。地域実習地の変更・課外活動の義務化・好きな先生の授業が減った等の学生の声やカリキュ

ラムの変更を含めて考えると、数値のみで判断はできないものがあると考えられる。
 なお関連する教員へのヒアリングからは



3) 教員辞任率

「教員辞任率」は、計画当初の教員が務めているかを検討できる。2年目から 31.25%の新設当時の教員は辞め、代わりに新たな教員が入り始めていることが分かった。他大学での最高数値は、16.67%であった。



学生のヒアリングや公開データの情報を重ね合わせると、大正大学はどこへ向かってい

るのか怪しいと感じた。この現状を変えることができる力の一つが学生だと考えるが、踏み込めば踏み込むだけわからなくなり、どこまで学生が踏み込んでいいかわからなかった。これまで大学を信頼してきたので信じられなかったし、信じたくないという思いを深くするものとなった。

5. 実践研究東京ラウンドテーブル（東京学芸大学）での報告 12月23日

(1) 概要

地域創生学部のしゃべり場実施から公開データを参照まで一連の調査の結果、自分が通う大学への不信感が大きくなっていき、外部の人の意見を聞きたいと感じた。ラウンドテーブルにおいて報告をし検討を行った。

(2) 内容

東京学芸大学のラウンドテーブルでは、しゃべり場に協力していただいた学生にも参加し、それぞれA・Bそれぞれ別の班で発表を行った。それぞれの内容を記載する。

1) A班

私が参加したA班では、現役の教師の方もいて、組織を変えるのは時間がかかるという話を中心だった。

・職員と話す機会を作ること。素朴な疑問は大事だけど、大きなものに結び付けないことも大切。いきなりおかしいと決めかかっていくとつぶされるから、疑問の説明を求めにく。また、なにか行いたいときは、他大学の例を出して、ここでもやりたい、と言う。

・問題は、現実とあるべき姿の間にあるから、あるべき姿を明確化していき、現実を整理していくことが必要。

・組織をすぐに変えることはできないが、長い戦いになることを考えて、次につないでいくネットワークを作っていくことが大切。

・勝利することではなく、負けないことであり、活動の成果を少しでも出す（例えば、チラシを配る時間が伸びた！でもいいから、次の人の希望になるようなこと）

・会社も大学の風土は変わらないため、折り合いをつけていく。

・大きく変えなくても、大学に対して疑問を持つことができる学生を少しずつ増やすことはとても大きいこと

・大人はあきらめて生きている人がほとんどで、それにおかしいと対抗する人はほんの一握り

・ほとんどの学生は大学に対して興味がない

2) B班

協力学生に参加してもらったB班では以下の意見が出た。

・自分がコントロールできるところで行う（地域創生以外で行う）

・長期的と短期的にできることを考える

・地域創生の良い面を見つける

(3) まとめ

地域創生学部のしゃべり場での衝撃が大きかったため極端な話にしすぎていたかもしれないと反省した。長期戦、という点については納得する部分もあるが(学校が変わるのに30年かかると思っていた方がいいそうで)、今いる学生を切り捨てたくはないという気持ちもあった。在学生に対してはピア・サポートで1人でも多くの学生に働きかけることをしつつ、大学が良い方向へ進むように少しずつ大学に働きかけることが必要だと感じた。

6. ピア・サポートに関わる学生メンバーへのフィードバック

(1) フィードバックとその結果

東京学芸大学で行われたラウンドテーブルの内容を報告し、また、今後のピア・サポート、ピア・ラーニング活動の在り方を考えるため、ピア・サポート活動をこれまで検討してきた学生グループメンバーやしゃべり場で協力いただいた学生達とこれまでの私の実践内容を共有した。

次の6つの意見や提案を得ることができた。

- ①後継者の育成について→ラウンドテーブル等のイベントと共同する。
- ②ピア・サポートやイベントを開くとしたら、参加する人がメリットを感じないと参加しようと思わない
- ③大学を変えることを学生は求めている
- ④悪い点ばかり見ない
- ⑤履修登録などは新生をターゲットにする
- ⑥組織を作るには遅いけど、作るなら、サークルにする

(2) これまでの取組への決別と新たな展開に向けた葛藤

フィードバック後、これまでかかわってきたピア・サポートの企画グループとの話し合いが行い、様々な問題があった前のグループを辞めることとした。

これにより新たに計画書の作成が始まったが、改めてなんのためにピア・サポートをしたかを明確にしていく必要を感じ、様々な人に相談した。私が実現したいことは何かを考えた。争いのない世界にするためには、お互いを知ることが必要だとずっと生きてきた。他の人を知るきっかけ、それによって自分自身の世界を広げるきっかけを大学で得ることができるのではないか、大学の生活の中でそのような場所を作りたいと思った。しかし、それは漠然としたものだった。

ピア・サポート活動の目的自体をいかに明確かしていくか。ただ集まって何かを得る、だけでは、直接的な参加モチベーションを高めることにつながらないことが危惧される。また、こうした活動は、既に活動している人は自分でやっているし、必要ない人にとっては、必要ないかもしれない。方針を決めあぐねる日々が続いたのである。

7. 福井大学ラウンドテーブルにおける混迷の深まり

(1) 参加目的と結果

これまでの活動を踏まえて、今後の構想を語り、意見を頂くため、福井大学で開かれたラウンドテーブルに参加し、今までの活動のまとめとこれからの構想の発表を行った。福井大学連合教職大学院の教員の方、小学校の先生（公立、私立）、大学の法人全体に関わっている方からご意見を頂いた。そこでは、いかのような手厳しい指摘があった。

1) ピア・サポートの目的について

何を目標しているかわからないから、アドバイスのしようがない。なぜこんなにネガティブな話になってしまうのか。不満を言って、傷のなめあいをしていても意味がない。また、最近の人はすぐに大学改革というけれど、中教審等の勉強が不十分で言うだけの人が多く不愉快。

2) 学生の探求心のなさ

不満があるならなぜその学部に入ったのか。

そう学生が思ってしまうのは、大学に入る以前の問題でもあるのかもしれない。進路相談や中学校・高校の進学実績のために受験させる傾向が原因にあるのではないか。（小学校の教員）今の学生は、何か課題を与えればこなせるけれど、他ができない。プロテストが足りない。

3) 物事の背景に目を向けていない

退学率等に対しても、退学する人が多いから悪い学校、教員がいなくなるから悪い学校とは言えない。教員が辞める点については、大学教員は研究者であるのだから、ずっととどまる必要はなく、ステップアップすることが大事。学生が好む先生は、比較的年の近い先生なのではないか、そうしたら、若い先生ほど他へ行くのは当たり前である。

4) 今後について

目的（ビジョン）をはっきりさせて、様々な人にアプローチするのもいいかもしれない。ピア・サポートに興味がない学生が多いというイメージかもしれないが、興味がある学生がいるかもしれないのでその可能性をつぶさない配慮が大事。

(2) ラウンドテーブルの振り返りと考察

今までとは異なる切り口でご意見を頂いたため、勉強になったが、関わってくれた学生たちを否定されているように感じ、居心地が悪かった。しゃべり場のテーマ設定について、理想の学生生活だと自由なことを書いてしまうと指摘を頂き、テーマ設定の難しさを知った。仕組みを作ることが重要だと感じた。

背景を考えることは確かに重要である。学生の、大学側への理解は足りていないかもしれない。しかし、大学もまた学生への理解が足りていないのではないかと相互に考えることが必要だと思う。

おわりに

以上、約1年間にわたってピア・サポートやピア・ラーニングに関する活動の構想と試行実施に取り組んできた。活動を通して、自分の未熟さ・甘さを痛感した。特に、自分が良いと思っても、他の人にとってはそうでないことのほうが多く、自己中心な考えを改めることが最大の課題となった。

活動を通して多くの人に助けていただいた。周りの人に助けをもらうことで、はじめて取り組めることができたため、今度は自分が人のためになる活動がしたかった。しかし、結局多くの人に助けられ、お世話になった割には自分が動けなかった。

今後のピア・サポート、ピア・ラーニングについては、大学職員として実現できるように勉強を続けていこうと考えている。4月から学生から職員に立場が変わることが、とても不安で仕方がない。自分自身の考えにも不安があり、自己中の考えや、あるいは逆に、自分の考えがなく他人に左右されることに陥るのではないかと危惧する。しかし、様々な人との連携を取り、この活動の経験も活かしていけるように努力したい。大正大学や職場の学生で同じような思いを持った学生が現れたら、サポートしていきたいという想いを強く抱くに至っている。

参考文献一覧

i 大正大学学生 TD スタッフふれいす(仮)2018 企画書

ii 「平成28年度設置 大正大学地域創生学部地域創生学科設置に係る設置計画履行状況報告書 学校法人大正大学 平成30年5月1日現在」他、他大の同種の報告書を参照。インターネットで公開されており、同じフォームで記載されているため比較参照することが可能である。なお大正大学の公開データは2018年5月1日現在のものであり、その後さらに数字が悪化している実態となっている。

【Ⅱ.個人研究実践2】

省察・実践するコミュニティへの試み

大正大学ラウンドテーブル実施報告

心理社会学部人間科学科3年 平良 菜月
仏教学部仏教学科4年 杉浦 寛生
人間学部教育人間学科3年 早川 誠

1. はじめに

大正大学でラウンドテーブルを実施しようと考えたのは、11月に早稲田大学で行われたラウンドテーブルに初めて参加したことがきっかけである。その際、自身の活動について周囲に発表する機会はほとんど経験がなく、まして他大・社会人の方に発表したことがなかった。また、同じ大学の人に対して発表を行ったとしても、周りは私が何をやっているかある程度分かっており、その逆も然りという状況の中での発表だった。そのため、発表自体が「なあなあ」になってしまったり、新鮮味がなかったり、発表に対して嫌悪感を抱く機会が多かった。

しかし、早稲田大学のラウンドテーブルは私の活動を全く知らない、まして私のことを全く知らない人が聞きに来る。そのため、どう発表したら伝わりやすいか、この施設や活動はみんな知らないだろうから、詳しく説明しようかなど、発表資料作成から自然と力が入るようになった。初めてラウンドテーブルに参加した際は、前もって準備した原稿のおかげか、スムーズに行うことができた。しかし、ある一人の早稲田大学の学生から思いもよらない質問が飛んできた。

「活動をやって、あなたにとってよかったことはなんですか？」

この一言が、今でも心に残っている。私は、子どもを対象とした体験活動等の学習支援に取り組んでいて、子どもがよい経験をすることで、私が役に立っているという気持ちでいた。この質問が投げかけられたとき、正直なところ私はうまく答えることができなかった。子どものためではなく、私のためになったこと、このことを早稲田大学のラウンドテーブル終了後、強く考えるようになった。逆に言えば、このラウンドテーブルに参加したおかげで気づけたとあっていい。以後、この意識の下、自身の活動に力を入れていけるようになった。

その後、東京学芸大学でも同様のラウンドテーブルが行われた。そこでは、主に社会人の方が多く参加している中で、私は早稲田大学のラウンドテーブルと同様の活動テーマを発表した。前回の反省点を踏まえての発表だったこともあり、周囲からも好評だったのではないかとと思われる。

そして、今回自身が通う大学でも同様のラウンドテーブルを開催したいと思い、企画した。

大学内という点を活かして、学部・学年関係なく、また学生・社会人問わず自身のことを語り、聴く会を開きたいという思いが常日頃からあった。自分のことをある程度知っている同じ学科の閉じられたコミュニティ内では話す経験はあると思うが、そうではなく、その活動を知らない外の人に対して話す力を育む機会をつくることは、学生なら就職活動等で役に立つことは間違いないだろう。こうした経験は必要であり、かつさまざまな人と交流できるきっかけにもなる。こうした趣旨から、今回大正大学ラウンドテーブルを開催することとしたのである。

2. 準備・方法

(1) ポスター制作

最初に取り組み始めたのがポスター制作である。ポスターの写真は、みんなが年齢・性別・地位など関係なく、フラットな関係で話し合っている場面を想像させるような写真を選定した。

今回が初回だったこともあり、ラウンドテーブルとは関係ない写真だが、次回から第一回目の写真を使用することが可能となる。

次に、文字などのレイアウトである。「実践し省察するコミュニティ」は以前参加した早稲田大学・東京学芸大学でのラウンドテーブルのタイトルである。この文言を拝借し、ポスター全面に記載した。ラウンドテーブルだけでは何が行われるのか不明瞭のため、ラウンドテーブルについての説明書きも入れた。

そのほかは、必要事項である日時・場所・問い合わせ先、担当者などを記載した。

(2) 要項制作

ポスターのみの広報を考えていたものの、ポスターだけではあまりにも情報量が少ない



大正大学ラウンドテーブル

実践し 省察する コミュニティ

For Community of Practice
and Reflection

実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴き取る

2019. 1. 29(火)

◎ラウンドテーブルとは...
少人数でグループを組み、丁寧に時間をかけて活動で取り組んでいることを聴き合い、話し合う、学び合いの場です。
報告者には活動を振り返りながら、自分の考えや思いを語ります。
参加者全員で一つの活動について考え、提案し、これからの活動を見直すコミュニティです。

・場所 : 大正大学 753教室
・時間 : 13:00 ~ 17:00
・参加費 : 無料

お申し込みフォーム
n_taira@outlook.jp
(QRコードからメール作成できます)

主催: 地域社会教育研究会
(担当: 平良)

写真1 作成したポスター
学生課の許可を受けた上で、学内掲示し広報した

ため、ポスター兼要項として制作することにした。載せた文面は、どのようにしたら学生が参加したくなるか、学生側のメリットを出した文章を考えた。その結果、学生が特に考えている「就活」ということに焦点を当てた文面とした。学生側のメリットになる「就活での面接発表時に自分のことを発言しやすくなる」ということを要項に設定した。知らない人に自信の活動を発表するということは、就活の面接官に対しての発言と同じと考えたからである。

要項のデザインは、背景を「空」とし、ラウンドテーブルの特徴的な「自由に、自分らしく発言する」ということを象徴させた。吹き出しのコメントは、本音を表したものであり、表面上の言葉では響かないと思ったため、正直な学生らしい、かつ学生以外の人も共感してもらえそうな文言を入れることに配慮した。

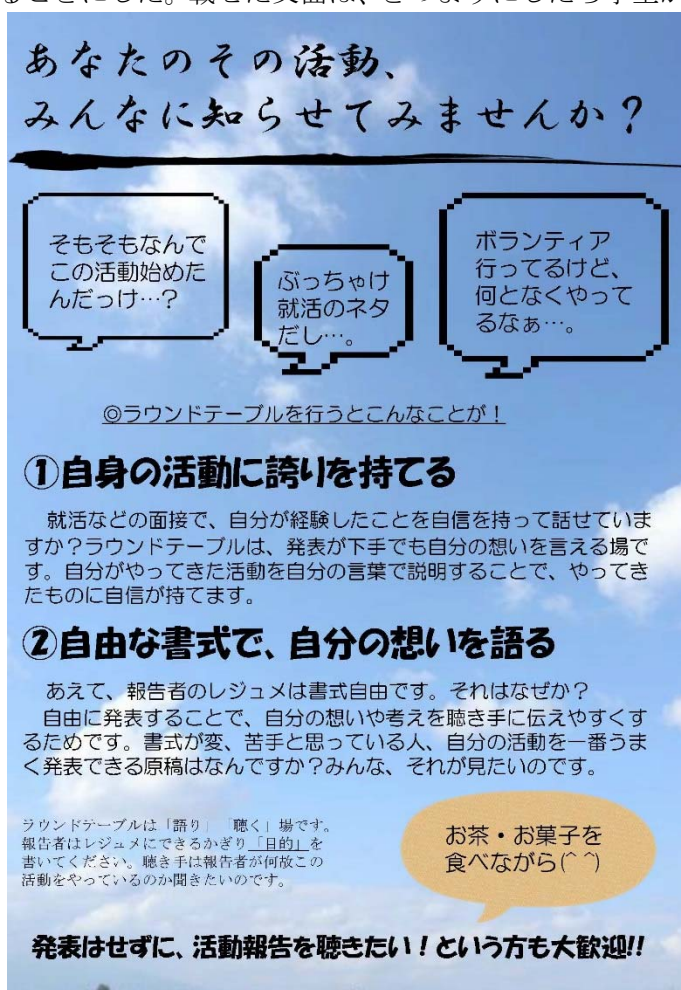


写真2 チラシに掲載した実施要項

(3) その他準備

会場設定は、私たちの活動を支える地域社会教育研究会を主宰する出川真也先生に依頼し80人規模が入る教室に手配していただいた。また、堅い発表会ではなく、お菓子や飲み物などを置いて、フランクな雰囲気を出すよう心掛けた。

また、発表の順番や、タイムテーブルを作成した。一人当たり40～50分とし、かつ一人ひとりの発表の間に休憩を設けるなど、時間が多少前後しても終了時間に間に合うよう心掛けた。

3. 内容

当日のラウンドテーブルでは次の話題が出され、活発なやり取りが行われた。

(1) 杉浦寛生 大正大学 仏教学部 4年

テーマ：寺院を活用した社会教育・社会福祉について

1) 発表者紹介

杉浦は、浄土宗の寺院出身者であり、宗学を学ぶ中で、寺院と地域の間ギャップを感じていた。さらに、自身も浄土宗社会教化者という資格の講座を受ける中で、社会の中の寺院の在り方、存在価値について深く考えるようになった。そこで、僧侶一般の法事等の行事には取組むことを前提としつつ、地域ニーズに合わせた寺院の利活用の方法を模索した。

2) 問題意識とねらい

まず、宗教施設である寺院を、観光寺院・一般寺院に分類した。そうした上で、寺院に参拝するに当たって必ずしも信仰心を必要としないことに気付いた。観光寺院に入ることは抵抗がないが、地域の寺院という門をくぐるのに抵抗があるという声が多いのではないかと。そこで、その入りづらさに対して寺院も何かしらの対応が迫られるのではないかと。

本来ならば、地域の集会所として寺院が存在するべきである。今日、寺院の社会的責任 (Buddhism Social Responsibility : BSR) が叫ばれる。等身大の寺院が行える社会的役割を考察し、地域と寺院を再結合する礎を築きたい。



写真3 ラウンドテーブルにおける発表の様子

3) 意見交換の内容

寺院と地域住民の間に隔たりがある現状を把握してもらった上で、寺院と全く関係ない立場から、「どうすれば寺院に人が来るか」もしくは「どんな寺院なら行きたいか」について意見を募った。そこで出た意見としては、

- ・寺院でラジオ体操をすればよいのではないかと。
- ・寺院の開放日を設けて、一般開放してはどうか。その時、体の不自由な方に対しては車いすを押すなどの配慮が必要。
- ・ベンチを設置する。
- ・携帯電話等の充電スポットを設置する。

などが挙げられた。

また、印象深い意見としては、寺院は早朝に活動しているイメージか、日中に閑散としており、活動が見えづらいという声が上がった。そのため、地域住民との接点がなく、寺院と地域に隔たりがあるのではないかと。改善策として、門前に立って通勤時に挨拶するのはどうか。同じく、神社と寺院の関係で、神社の方が入りやすいとの意見も上がった。神社や神社はありのままの自分の存在への感謝を祈る場であり、寺院か神社なら神社に行くとのことだった。理由は「なんとなく」とのことだった。この「なんとなく」の中には、氏神に対する信仰という面よりは、寺院の敷居の高さを無意識に感じているのではないかと。

では、なぜ寺院に入りづらいと思われがちなのか。ラウンドテーブルにご参加いただいた、

街歩きボランティアに携わり、町の歴史に精通する高橋隆氏はこう語る。

・街歩きガイドで寺院に赴くこともある。寺院併設の墓地にある著名人の墓を参拝することが目的だ。

・墓地は寺院の奥にあることもあり、門をくぐって、寺務所の隣を通らなければならない。

・その際に、寺務所に一言声をかけるようにはしている。

・都立の霊園などは生活道路としても使われており、立ち入りがしやすい。

・檀家でもない部外者が境内に入ることは一般参拝者の迷惑になるかもしれない。

・法事や墓参りをしている人がいたら、近くで大きな声でガイドをすることははばかられるだろう。

・信仰を持つ人と持たない人の温度差がある。

・寺の歴史を調査した上で、その寺の僧侶に尋ねたところ、その僧侶は、自分はバイトなので知らないといった。

以上のことから考察するに、部外者が寺院に立ち寄るに当たって、一定の敷居を感じていることが分かった。一般寺院に関しては、無断で立ち入ることによって寺院及び寺院関係者の迷惑となることを懸念視していることが分かる。逆説的にとらえれば、それらの諸問題に対し双方の同意があれば、問題はないといえる。寺の歴史に関しては、住職から弟子への伝承が行われた上で、歴史を語ることができればよいのだが、都会では僧侶不足からか、バイトとして駆り出される僧侶も少なくない。それが、地域性を無視して儀式のみを行う僧侶という印象を強めていることも否めないのではないか。それはまた別問題であるが、高橋氏の話からも、寺院が持つ財産にアクセスしたいという需要と、アクセスのしづらさが伺われる。

4) まとめ

今回、寺院と地域の共同参画の可能性について、寺院出身者とそうでないものが意見を交わした。寺院出身者が、内部から、現代の寺院が閉鎖的であると感じているのに対して、外部からも少なからず閉鎖的であるとの回答が得られた。しかしながら、町の魅力を伝える上で、寺院の需要も一定程度あることも確認できた。寺院には、人々の信仰を守る義務があると感じる。檀家をはじめ、信仰の持つ知的財産が損なわれてはいけぬ。そのうえで、寺院の持つ公共性を生かし、地域と共同参画することが求められる。その方法は地域によって異なるが、寺院を利活用する動きが、地域側から出てくることを寺院が望んでいる風潮もあるように思う。今後、寺院を活用した社会活動が増加する活動に自身も身を投じていきたい。

(2) 平良菜月 大正大学 心理社会学部 人間科学科 3年

テーマ：社会教育施設で“学ぶ”楽しさ広がる“未来”

1) 発表者紹介

子どもが学校教育以外で何かを学ぶためには、お金をかけなければならないのか。私は幼いころからこう感じていた。もともと裕福な家庭ではなく、学校教育以外での習い事など行ったことがない、部活動がいわば学校外に近い活動だった。大学に入るまでは学校以外の勉

強の機会が得られず、むしろ勉強は学校しか頼れなかった。

大学受験に失敗し、浪人生活を余儀なくされたころ、親に頼れなかった「教育費」を自分のアルバイト代で賄ったことが大きなきっかけになった。初めて塾に通い、勉強の楽しさを見出すことができた。しかし一方で、塾にお金をかけなければこうした勉強の楽しさを見出すことができないのかと落胆する部分も感じていた。

そんな中、大学2年に進級する頃、社会教育主事の資格に出会い、生涯学習施設で行われている様々な講座を知った。その講座は年齢・性別を問わず、学びたい人が集まっているため、参加者はとても講座を熱心に参加している意欲的な人たちである。そして、私が一番懸念していた費用が、こうした講座ではとても安価な料金で一部無料の講座さえもある。このような場所を私は求めていたのである。

生涯学習施設は子どもから大人まで幅広い人が利用している施設で、私は実習生として実際の講座に参加した。

2) 概要

豊島区生涯学習施設みらい館大明で行われている「スパイス MAP」と、「子ども映画プロジェクト」の両事業にスタッフとして参加したことについて発表した。みらい館大明の説明から入り、各講座の説明と考察を述べた。

豊島区は、外国人が年々増加している一方、生涯学習施設のみらい館大明では外国人の利用数はほとんどない状況という背景がある。スパイス MAP は、外国人の利用するきっかけを作るために、私たち日本人が外国の文化を「食」という観点から取組む講座である。外国食材店で購入した調味料を用いて、日本の調味料を一切使わない料理を行った。外国について全く関心がない私だったが、この講座をきっかけに外国食材を実際に購入したりと、興味関心の領域が増えたように感じる。

子ども映画プロジェクトは、小学3年生~中学2年生の子どもたちが中心となって、映画を作る講座である。子どもの夏休み期間を利用して行われた。実際にカメラを子どもが操作したり、マイクや演者など、大人が介入する場面もあるが基本的には子どもが中心となって映画を作り上げた。

この子ども映画プロジェクトは私が当初懸念していたことを解消してくれるかのような講座である。子どもが学校では経験することができない映画作りを、生涯学習施設で安価に行うことができる。最初、映画作りに興味関心がない子どもも、この講座が終わったころにはまた映画作りたいたいと言ってくれた。

3) まとめ

今回、みらい館大明での活動を発表したのは3回目である。3回目ということもあって、少し慣れた発表になったように感じた。参加した講座に対して咀嚼して考えを深めた上での発表ができたと実感している。

また、発表を通して自分の活動を周りの人に伝えることと同時に、活動拠点の宣伝にもなる。私は毎回、みらい館大明のことをもっと知ってもらいたいという気持ちから、みらい館

大明の QR コードをレジュメに添付した。単に口頭で調べてみてくださいと言うよりも、手がかかりとして QR コードを掲載することで興味をもって読み込んでみたくなると思ったからである。

今回は、さらに今行っているその他の事業についても発表したいと思う。

(3) 五十里崇行

テーマ：死生観・人生観 ～看護師である自分を通して～ (文責：杉浦)

1) 発表者紹介

五十里氏は、現在 39 歳の精神科を中心に勤務している看護師である。急性期病院からホスピスへ職場が変わると、人の死に携わることが多くなり、精神的に負担を感じるようになる。看護師をやめたいと強く感じ、現在は、精神科病院での週 2 日の夜勤アルバイトで生計を立てている。自身も病の診断を受け、ガンになりやすい体質ということが分かり、完全燃焼できる人生について深く考えるようになる。

幼少期から正義感にあふれ、いじめられている人を無視できない性格であった。そのため、仲裁に入ってはともにいじめの対象になることも多かったという。精神科病院勤務時にもいじめについて悩まされることがあり、以降、いじめについても深く考えるようになる。

2) 概要

自分の経験をもとに、いじめの根本原因は何なのか、また、どのようなメカニズムでいじめが起こるのかについて意見を交わした。いじめやハラスメントの加害者は、理性が欠如しているとして、人間の弱さや愚かさと言及している。発達心理や格言を交えつつ、いじめに同対するべきなのか提言をいただいた。

3) 報告と意見交換の内容

「イジメは弱い人がイジメられているんじゃない。弱い人がイジメている。」「社会で、あらゆる暴力・差別・イジメ・〇〇ハラスメントのすべては、本能で生きている人と同じ行為である。」という命題をもとに議論は展開した。

もし本当にそうであるならば、なぜ人は強くなれず、同じ過ちを繰り返すのだろうか。そこに対し同氏は、人間は過ちを繰り返す生き物であるとして、学童期の発達に関係があると述べた。学童期に他者との格差を感じ、優越感を得たいと思う気持ちが初期のいじめであり、大人のいじめもその延長にあると述べた。結論としては、社会全体がイジメの本質に気づいていないことに問題があるとまとめた。

ディスカッションで提起された参加者からの意見として、いじめのきっかけは、劣等感や肩がぶつかったなどの些細な諍いであるというものがあった。また、80 代の高橋さんによると、小学校時代にはいじめの概念はなかったという。時代とともにいじめやハラスメントをゆるさない風潮が出てきたという意見も出た。同じく高橋氏は、暴力やけんかは昔もあったという。諍いが起きた段階で、けんかでお互いけりをつけたという。今は、生徒同士のけんかも許さないという風潮すらある。それはモンスターペアレンツの存在や事なかれ主義

の弊害があるのではないだろうか。そのような社会で、行き場を失った怒りが蓄積して爆発を起こすのではないか。実際に会う以外にネットなども普及して SNS で簡単に自分の意見を発信することができるようになった。しかし、その弊害として、目の前の諍いを解決する手段を持たなくなりつつあるのかもしれない。結果として人付き合いに苦勞して、陰湿ないじめやハラスメントへと発展するのではないか。また、発達段階で十分な人とのかわりがないままに成人になってしまうから、大人になっても子供のようなことをしてしまうのではないかという意見も上がっていた。

4) まとめ

いじめ・ハラスメントの問題に取り組む五十里氏に、いじめのメカニズムに関して発表いただいた。誰もが心のどこかにあろういじめに対する思いと、五十里氏の感じるいじめ像が交わってよい議論が展開された。いじめの根本解決という話にまでは至らなかったが、活発に様々な論点が出されたため、いじめを考えるきっかけになった。五十里氏の今後の事業展開に着目したい。

(4) 高橋隆 エリアガイドボランティア としま案内人 駒込・巣鴨

テーマ：これまでの人生と社会教育・生涯学習について (文責：早川)

1) 発表者紹介

高橋氏は、「としま案内人 駒込・巣鴨」という社会教育団体に所属し、駒込と巣鴨の地域を中心として地域ガイド活動を行っている。また、東京江戸博物館のガイドも行っている。80 歳を超えても学習意欲が落ちることはなく、今でも歴史や文化についての学習をしている。社会教育に関して非常に関心があり、高橋氏の生き方はシニアの方に新たな活動の選択肢を与えてくれると考えられる。

2) 概要

高橋氏のこれまでの人生を語り、どうして社会教育・生涯学習に関心を持ち、活動を行うようになったかを説明した。また、社会教育が老後においてどうして大事なのかも説明された。

高橋氏は幼少の頃は福島県の田舎で育った。元々は東京の生まれだったが、空襲による疎開のために福島に移った。高橋氏は幼少の頃は学校での喧嘩は多かったもののいじめと呼ばれるものは存在しなかったという話や学校が終わると神社や寺院の境内でかくれんぼなどをして遊んでいた話をしてくださった。この二つの話は高橋氏より前に話をしてきた杉浦氏と五十里氏の発表を受け、自分の幼少時代と今の時代との変化を語ってくれたものである。

その後、高橋氏は社会人時代の話をしてくださった。高橋氏は社会人になると経理の仕事をしてきた。今のようにブラック企業といった概念が存在していなかったため、会社のために死ぬ気で慣れない経理の仕事にも取り組んだと語った。

そして、会社を定年退職し、シニア世代となった高橋氏は社会教育・生涯学習に興味を持

ち始める。家にいてもやることがないため、豊島区の歴史を学ぶ講座に参加したことがきっかけとなる。「としま案内人 駒込・巣鴨」の団体もここで作られ、初期メンバーの一人となった。

3) まとめ

高橋氏の歩んできた人生を振り返る事でこれまで議題に挙がっていたいじめの問題と寺院活用の問題を別の視点から捉えることができ、新たな考えを得ることができた。

高橋氏のように社会教育・生涯学習に関心を持ち、社会教育団体の一員として活動をしている方からのお話ということで社会教育・生涯学習のあり方を学ぶ事ができたと感じる。また、幼少期から順を追ってお話をしてもらった事によって、話の繋がりや内容が理解しやすく、わかりやすい発表であった。

(5) 早川誠 大正大学 人間学部教育人間学科 3年

テーマ 学生と地域学習

1) 発表者紹介

報告者は、豊島区长崎町の地域文化創造館と「としま案内人長崎町」の企画した大学生を対象とした地域ガイドに参加したことで、自分の住んでいる地域について知らない事が多くあると考えるようになった。

「としま案内人 駒込・巣鴨」で実際に地域ガイドについての実習を行い、学生が地域ガイドをすることで学生が地域について興味関心を持ってくれると考えるようになる。

2) 概要

発表の構成は、「地域ガイドとは何か」、「学生ガイドプロジェクト」、「地域人材育成の三角形モデル」の三つである。

まず、地域ガイドについて説明をした。地域ガイドとは、ある一定の地域を設定してガイドコースを作成し、お客さんを集めて説明して回る取り組みである。実際に私自身も体験して感じた事は危機管理やタイムキープなど技量の必要なことも多く、簡単なようで簡単ではない。また、きちんとした地域の歴史を把握していなければお客さんから指摘を受けることもあり、半端な気持ちで取り組むことはできない。

このように地域ガイドは、お客さんへの説明だけでなく、全体を把握しつつ行動をしなければならない。そのため、学生が地域ガイドのやり方を学び実践することにより、コミュニケーション能力の向上といった社会人基礎力を身につけることができると考えた。

学生のみでは、ガイドをすることが難しいと考えたため、としま案内人の方々とともに活動を行おうと考えた。その中で、学生ガイドもとしま案内人も同じ地域の次世代育成を目標としていることを発見した。三角形モデルはその考えを図式化し、分かりやすくしたものである。

3) まとめ

以前東京学芸大学のラウンドテーブルで発表したレジュメに手直しを加えて、今回発表

した。まとまりがなかった部分が多くあったため、わかりやすい言葉に変えて明言した。学生ガイドや三角形モデルの話をする場合、実際の取り組みの資料が必要であると感じた。学生ガイドはメンバーを集める段階で止まってしまっているため、メンバーを集め活動をしてみることで、実践による仮設検証に取り組みたいと考えている。

4. 全体まとめ・意義

全体として、和気あいあいとした良い雰囲気だった。企画通り、皆それぞれ行っている活動が異なっていたため、さまざまな意見を聞くことができた。タイムスケジュールをあらかじめ設定していたが、人によって話が長くなってしまったり、質疑応答が白熱したりと一人当たりの設定した時間を過ぎてしまうこともあった。しかし休憩時間を調整したりしたおかげで、時間通りに終わらせることができた。時間だからといって、途中で話を中断するとせっかく話すために来ていただいた方に失礼にあたるかと思い、できる限り最後まで聴けるよう時間配分には十分心掛けた。議論が名残惜しい場面もあったが、途中で話を強制的に終わらせる場面は見受けられなかった。

ラウンドテーブルを開催するにあたって、自分が日ごろ思っていることを述べる場として貴重であるとあらためて感じた。当初は自分の活動を発表し、その活動をもう一度見直すことで、より意味のある活動を展開することができるというものだった。しかし、今回のラウンドテーブルでは、自身の活動を発表することに加え、自分が日ごろ疑問に思っていることを今の活動に結びつけて話すことができた。これはとても有意義であり、社会問題を考える場としても機能しているのではないかと考えられる。



写真4 活発に行われた意見交換の様子

5. 結び 今後の課題と展望

初回のラウンドテーブルとしては十分だったと思われる。しかし、当初のターゲットとしていた学生の参加が少なかったことが大きな課題である。その原因の一つは、十分な広報の時間が取れなかったことである。学生はアルバイトをしている者が多く、まして春休みという長期休みの初日だったため、1か月以上前から予定を入れている人が多かった。そのため、長期休み開催以外の場合でも、アルバイトのシフトを空けてもらうために、最低でも一か月前にはポスター・要項を完成したものの広報に移る必要があった。そういったことを踏まえると、開催にあたって2ヶ月前から取り掛かる必要があると考える。

今回は、平良が中心となり、杉浦・早川といった学生をはじめ、地域社会教育研究会の学

生達や学生課の協力を得て無事開催にこぎつけることができた。しかし本来こうしたイベントには複数人で分担作業をしながら行う必要がある。今後は、ラウンドテーブルを設定していく上では、小さくても組織化して運営していくことが求められる。

【Ⅱ.個人研究実践3】

寺院と地域の関わり構築に向けた実践

－「しゅりる」高齢者の地域包括支援ネットワーク作り－

地域蒼生舎 HIDDEN（学生団体）

常務理事 杉浦寛生

1. 問題意識

内閣府の調査によれば、高齢者の2割が地域社会の関係が希薄であるとしている。特に単身世帯では、孤独死を身近な問題だと感じている。また、国立教育政策研究所によれば、社会教育団体が成熟した際の学習者支援として、他の団体と繋ぐネットワーク的援助が求められている。

2. 企画の目的と特徴

(1) 目的

本企画は、市民参加型の寺院の掃除・茶話会を行い、高齢者と社会教育団体との繋がり
の機会を設けることで、孤独死・孤立死の問題の解決を目的とする。

- ①孤独死・孤立死の問題の解消
- ②高齢者の社会参加・生涯学習への参加
- ③健康寿命の向上
- ④異常の早期発見
- ⑤社会教育団体同士の連携による活動の幅の向上
- ⑥文化財の再活用
- ⑦地域イベントなどの消費による街の活性化
- ⑧次世代の福祉を担う教育プログラム確立

など、社会教育や福祉分野での波及展開を企図する。

(2) 特徴

1) 「しゅりる」の三つの柱－教育・福祉・地域創生－

しゅりるは、教育・福祉・地域創生を目的として企画された。まず、社会問題となっている孤立死の予防として、地域の寺院を中心として高齢者のコミュニティづくりの場を作ろうという趣旨に端を発した。長期的に見て持続可能な社会教育活動・コミュニティ創生活動を目指す。

2) しゅりるの由来について

「しゅりる」とはお釈迦様の弟子である「周利槃特（しゅり・はんどく）」から頂いた。彼は『天才バカボン』に登場する「レレレのおじさん」のモデルになった人ともいわれている。次のエピソードが有名である。

周利槃特は何か月たっても、お経の一句すら覚えられなかった。お兄さんからもあきれられてしまい、他の修行僧からも責められた。何をやってもダメな自分が嫌になり、涙を

流し、ついに心が折れて教団を去ろうとした。お釈迦様は、そんな姿を見て、周利槃特にお掃除の仕事を与えた。「塵(ちり)を払わん、垢(あか)を除かん、この言葉を唱えながら、お掃除しなさい」と。ところがその言葉さえも覚えられなかったので、何度も何度も教えてあげることにした。ついに「塵を払わん、垢を除かん」が唱えられるようになりました。その時気づいた。「自分の心にある迷いが、塵や垢のように積もっているんだ」と。それから、彼にはもう心の迷いはなかった。お掃除をきっかけに大切なことに気づいたわけである。

生きる上で、自分の無力さや情けなさを感じることもあるのではないか。その中でも人間は、いくつになっても気づきを見つけられる。周利槃特のエピソードを社会教育・生涯学習の理念と重ねて当活動名の由来とした。

3、活動内容—早朝清掃と茶話会を軸とした居場所作り—

(1) 活動内容

寺院や教会などを活用して、早朝に、学生をはじめ、高齢者・社会教育団体・商店などが一堂に集まり、簡単な寺院の通常活動の一つである掃除をするとともに、茶話会を行う。単なる高齢者支援ではなく、地元の様々な人が一堂に会することによって、刷新的なコミュニティの構築を図る。その中で、新たな仲間づくりや社会教育団体への参加があることが理想的だと考えており、寺院を特定の信仰者のための施設だけでなく、社会のためのコミュニティ施設として位置づけることで、寺院の信頼の向上も図る。

(2) 展開性について

活動の成果として、高齢者や社会教育団体が主体となって、町内会や商店街のイベントなどに発展させる。主催者・寺院は、高齢者と社会教育団体、あるいは社会教育団体同士を繋ぐ機会を創出する。

4. 望まれる成果

見込まれる成果について、先述8つの観点を集約し簡潔に示すと以下4点である。

- ①高齢者の孤立や孤独死といった社会問題の解決
- ②社会教育団体(生涯学習団体)の活動の幅の拡大
- ③仏教文化への関心の向上や、文化財などの再活用による文化レベルの向上
- ④地域経済の発展

5、試行実践(プレテスト)の実施の模様

北区赤羽の正光寺にて、平成31年2月14日にプレテストを行った。当日は、学生合わせ約20名の参加をいただいた。まずは、ご多忙の中お越しくくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

プレテストは、前日の搬入から始まり、当日は、しゅりるの概要を述べたのち、実際の動きをなぞって、最後に反省会という流れで行われた。そこで気づいたことをいくつか述べたい。



写真 プレテストにおける関係者のオリエンテーションの様子

(1) タイムスケジュールや役割分担の把握について

実際にやってみて、給湯にかかる時間や、割く人員の数などに改めて気づかされた。タイムスケジュール、役割分担表のブラッシュアップの必要性がある。

(2) ターゲットに合わせたコンテンツ提供

今回は、コンテンツを用意していなかった。そのため、本番の流れを理解できず、参加者には、退屈な思いをさせてしまった。思えば、一口に茶話会をするとはいっても、それ以前に皆が一つになれるコンテンツの模索は必要であると強く感じた。そして、マンネリ化を避けるため、常に新たなコンテンツを模索する必要がある。そこに、社会教育団体との接点を創出できる機会がある。今後、朝食を食べることなどに発展したときに、料理関係の団体との連携も図れる。

(3) 多くのニーズにこたえられる事業づくり

寺院でやるうえで、宗教色の問題はシビアである。極力出さないようにしたほうが万人に受け入れられやすいだろう。ニーズにばらつきがある中で、強制的に参加させるようなことはあってはならない。

そのため、勤行は行うが、勤行に参加しなくともよい。また、掃除に疲れたら先に談話室に戻ってもよいというフレキシブルなシステム作りが必要だと強く感じる。それには、スタッフ間での連携が求められる。



写真 プレテストで行われた勤行の様子

(4) スタッフの育成

スタッフの育成に関する活動が事前に十分ではなかったため、当日になって学生が思うように動けず、全体的に進行に遅延してしまった。またボランティアやソーシャルワーカーに関する知識を持つことの大事さも痛感された。

事前に綿密な打ち合わせが必要だが、継続的な取組の中で、最終的には、各人で判断してもらいたいと考えている。専門家に講義を依頼。初参加の人には、マニュアルなどで対応。今後、マニュアルをネット上で流布することによって、しゅりるがモデルケースとなり全国に波及展開していくことも視野に入りたい。



写真 話し合いの様子



写真 掃除の様子

6. 今後の課題

先に挙げた課題は直近の課題であるとして、常時考えなければならない課題として、以下のようなものがあげられる。

- (1) 高齢者（支援を必要とするお年寄り）に対する宣伝方法の確立
- (2) 地域リーダーの育成方法の確立
- (3) 今後全国展開するに当たって、地方都市で実施可能か否かの検証。
- (4) 他地域で実施するにあたって、地域調査の方法の確立。

寺院の場を生かした学びとコミュニティ作りの実現に向けて、引き続き取組を展開していきたい。

(参考)「しゅりる」沿革・スケジュール

(1) 沿革

2018年

7月	着想。
9月18日	生活協同組合コープみらい・みらいひろば（北区）に参加協力を求める。
10月1日	北区和湊の正光寺にて住職と打ち合わせ。正光寺の使用許可をもらう。
3日	（株）ピーコック印刷（北区西ヶ原）に趣旨を説明。同社が行っている「まいぷれ北区」事業の一環として連携を取る。
12日	としま案内人の方々と町歩き調査実践。
15日	地域蒼生舎 HIDDEN・しゅりる HP を作成。
24日	（株）ピーコック印刷の協賛をもらう。北区社会福祉協議会に趣旨を説明し、連携をとる。
25日	正光寺にて、（株）ピーコック印刷立会いのもと施設の視察を行う。
11月1日	「地域蒼生舎 HIDDEN」団体設。
3・4日	大正大学・大学祭「鴨台祭」“地域社会教育研究会ブース”での発表。
7日	2018年度「コープみらい くらしと地域づくり助成」に助成申請。
9日	（株）亀の子束子西尾商店から掃除用具の提供。
10日	第13回早稲田教育実践フォーラム（早稲田大学）での発表。
12月	（株）亀の子束子西尾商店からほうき30本を受け取る。

2019年

1月9日	（株）ピーコック印刷社内にて打ち合わせ。第1回の日程を3月27日に決定。
10日	アースデイ東京2019第3回実行委員会に参加。
14日	社会福祉士であり、北区議会議員の吉岡慶太氏と意見交換。
2月7日	アースデイ東京2019第4回実行委員会に参加。 2018年度「コープみらい くらしと地域づくり助成」の結果通知。5万円の助成をもらう。
14日	正光寺にてプレテスト実施。しゅりる関連団体合同の打ち合わせを実現。
3月5日	しゅりる関連団体打ち合わせ。（予定）
27日	しゅりる第1回（予定）

(2) 年間スケジュール

11月	（株）ピーコック印刷・社会福祉協議会等しゅりる関連団体を交えた打ち合わせ（月1回程度）
3月	企画実施前の協賛企業・参加者との最終打ち合わせ
3月	企画実施開始（月1、2回程度開催）
4月	アンケート結果（高齢者の要望）のフィードバックとして、参加可能な社会教育団体を募る・メディアに対するPR活動の強化（随時）
9月	イベント開催に向けた協賛企業・参加者での調整会議
10月	成果の確認としてのイベント開催
11月	大正大学・文化祭での成果発表

協賛・関連団体

生活協同組合コープみらい

(株) ピーコック印刷

(株) 亀の子束子西尾商店

北区社会福祉協議会

赤羽高齢者あんしんセンター

地域蒼生舎 HIDEN

